

「図画工作科を教えるために」 教科に関する科目における実践【3】 ～インスタレーション、造形遊び～

吉田 貴富

Learning to Instruct Arts and Crafts:
A practice in a course for subject teaching in a teacher training program【3】
～ Installation Art, Zokeiasobi (Formative Play) ～

YOSHIDA Takatomi
(Received August 6, 2014)

キーワード：図画工作、教員養成、小学校、教科指導、教科に関する科目、造形遊び

はじめに

本稿は、小学校免許取得のための「教科に関する科目」の図画工作科に関する授業科目における実践を振り返り考察するものである¹⁾。

上記に相当する授業科目として筆者は2014年度、山口大学における「初等科図画工作」と梅光学院大学(非常勤)における「図画工作」を担当している。

本稿では、2014年度前期の実践の中から、「インスタレーション、造形遊び」について報告し考察する。

1. 問題意識

1-1 造形遊びを取り上げる必要性

小学校免許を取得する学生に「小学校の図画工作科で造形遊びをやったことがある人?『自分が経験した、あの活動が造形遊びかな?』」と思い出した人?と毎年尋ねているが、ほとんど手が挙がらない。これが図画工作科の実態である。造形遊びが学習指導要領に盛り込まれてから30年以上が経過しているのに、学び手の側に「造形遊びを体験した」という確たる記憶が無いのである²⁾。

1998年(平成10年)版学習指導要領によって、造形遊びは1年生から6年生まで全学年で実践すべき教科内容となり、現行の2008年(平成20年)版学習指導要領に引き継がれている。1998年(平成10年)版から、図画工作科の内容の「表現」は、いわば「造形遊び」と「その他」となっており、造形遊びは、図画工作科の内容の「表現」の2本柱のひとつとなっているのである。

2014年度の大学2年生の大半は2001年度から2006年度に小学校に就学した者たちである。制度上は、小学校時代に全学年において造形遊びを経験した(学習した)はずの世代である。しかし、上記の如く、「造形遊びをやった」という自覚は乏しい。「木版画はやりました」と同等の確たる記憶は無いのである。

造形遊び不振の原因や背景は単純ではないだろう。その究明とは別に、当面我々に出来ること、やらねばならないことは、将来、図画工作科の指導にあたるであろう学生に造形遊びの存在を知らせ、体験的に理解させることである。小学校免許取得者に造形遊びを理論と経験の両面から理解させておくことは、今後の図画工作科の充実のために大切なことであり必須とも言える。

1-2 インスタレーションを取り上げる必要性

本稿に連なる論考【2】の「1-3 美術教育と『大人のアート』」の節で述べたとおり、美術教育をいわば「子どもの論理」だけから導こうとする立場に筆者は反対である。

美術教育は、いわば「子どもの論理」と「美術の論理」から導き出される。これが事実である³⁾。

大人の美術の世界が写実のみをよしとする時代には、子どもたちにも写実的な描画能力が求められた。

チゼックが「子どもの美術」を「発見」できたのも、いわゆる「板塀の落書き」のエピソードや「下宿の子どもたち」のエピソードや「妹の造形活動を観察した」エピソードに見られる、チゼックが「子ども」をみる資質に恵まれていたことだけが理由ではなく、19世紀後半以降の非写実的で多様な造形表現の登場があったからであり、チゼック自身が当時の最先端、いわば前衛であったウィーン分離派と交流があり価値観を共有していたからである⁴⁾。

「造形遊び」もしかり。「造形遊びは、大人のアートから発想したのではなく、子どもたちの姿から構想した」という趣旨の言説は嘘である。20世紀後半のアートの状況が無ければ、誰も「造形遊び」を思いつかなかったであろう。事実として、比較的近いところの美術教育史をひもとけば、「造形遊び」的な実践の先駆者たちは、当時のアートの中でもいわゆる現代美術が大好きで、それを子どもたちの造形活動に応用したことがわかる⁵⁾。

この授業の受講生に、「オブジェという言葉を知ったことがある人は？」と尋ねると何人もの手が挙がるが、「インスタレーションという言葉を知ったことがある人は？」と尋ねると、美術の学生以外はほとんど手が挙がらない。

美術を専門としている立場からは、インスタレーションは一般に認知され普及している表現手法であると思われるが、実態はそうではない⁶⁾。

ものを並べる造形遊びを理解させる際に、筆者はその背景にあるインスタレーションを教える必要があると考えているが、上記のような実態、即ち大学生がインスタレーションそのものをほとんど知らないという実態を踏まえるならば、大学における図画工作科に関する授業の中でインスタレーションを取り上げる必要性はさらに高いものであると言えよう。

ちなみに、筆者は、図画工作科に関する指導法の授業（山口大学「教科教育法図画工作」、梅光学院大学「図画工作科の指導法」）において造形遊びを講じる際に、教科に関する科目におけるのと同様の扱いでインスタレーションを取り上げている（表現・制作は伴わない）。

2. 実践

2014年度、「インスタレーション、造形遊び」としてほぼ同じ内容の授業を山口大学「初等科図画工作」と梅光学院大学（非常勤）「図画工作」において実践した。本稿では山口大学「初等科図画工作」における実践を記述する。

2-1 授業の枠組み

「初等科図画工作」は、小学校免許取得のために開設されている「教科に関する科目」である。開設期は第3セメスター。前期金曜日9・10時限。

毎年140名前後の受講者があり、2班に分けて、教員5名が担当している。

各班とも「平面造形」「立体造形」「鑑賞・美術史」の3分野から成り、2014年度、筆者はB班の「平面造形」を担当した。筆者担当分は全6回。授業実施日は、5月30日、6月6日、13日、20日、27日、7月4日であった。

教室は、山口大学教育学部21番教室。

受講登録者数はB班65名。

筆者は平面造形を主たる内容としているが、造形遊びにつながり図画工作科全般に通底するような内容も盛り込んでいる。そのひとつが、今回報告する「インスタレーション、造形遊び」である。

授業の中では課題の説明と、提出された作品の鑑賞会を行なうだけであり、学生が作品をつくり撮影・送信する活動はいわば宿題の形である。

2-2 「インスタレーション、造形遊び」

2-2-1 課題の説明

吉田担当分第4回の授業（6月20日）において、Power Pointとそのスライドをプリントアウトしたものをを用いて説明を行った。

この宿題の前の宿題「顔にみえるもの」の全員分の作品の鑑賞会に続いて、「インスタレーション、造形遊び」の説明を行った。

以下に、そのスライドの内容を列挙する。

■次の宿題

前回「顔にみえるもの」は「手を加えてはいけない」

今回は「手を加えます」

しっかり聴いて理解してください

■図工で「つくる」と言えば・・・

「作る」

「描く」

「切る」

「貼る」 e t c

■キーワード

1. インスタレーション

Installation art

cf. install 置く、据え付ける、

1970年代以降一般化した、絵画・彫刻・映像・写真などと並ぶ現代美術における表現手法・ジャンルの一つ。

ある特定の室内や屋外など、場所や空間全体を作品として体験させる芸術。

★置く・並べる

■高原和子のインスタレーション作品の写真7点

人工物、自然物

■キーワード

2. a r t = 人為・作為・人工

⇔ nature

人が、外界になんらかの造形的なはたらきかけをする行為そのもの

= アート

■アンディ・ゴールドズワージーのインスタレーション作品の写真7点

植物、石、氷

■ちなみに

中国語でインスタレーションは、「装置」(zhuāng zhì)

■柳幸典のインスタレーション作品の写真

「ザ・ワールド・フラッグ・アント・ファーム」1990年

「バンザイ・コーナー」1991年

■キーワード

3. 美、造形的な「おもしろさ」

(知的な興味をそそられる)

e x . 規則性

非日常性

テーマ性

物語性

メッセージ性

■このようなアートが出てきた歴史

マルセル・デュシャン

「自転車の車輪」1913年

「泉」1917年

マン・レイ

「破壊されるべきオブジェ」

「贈り物」

■「何でもあり」的な今日のアートの状況

でも「デュシャンの掌」

by 西岡文彦

cf. お釈迦様の掌

■参考までに

小学校図画工作科の内容として

「造形遊び」というものがあるのを知っていますか？

■造形遊び

S52（1977）年版学習指導要領

低学年に登場

H元（1989）年版学習指導要領

中学年に拡大

H10（1998）年版学習指導要領

高学年まで拡充（全学年）

■2008年版学習指導要領より（小学校は2011年度から全面实施）

1 目標

表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

■2008年版学習指導要領より

〔第1学年及び第2学年〕

1 目標

(1) 進んで表したり見たりする態度を育てるとともに、つくりだす喜びを味わうようにする。

(2) 造形活動を楽しみ、豊かな発想をするなどして、体全体の感覚や技能などを働かせるようにする。

(3) 身の回りの作品などから、面白さや楽しさを感じ取るようにする。

■2008年版学習指導要領より

〔第1学年及び第2学年〕

2 内容

A 表現

(1) 材料を基に造形遊びをする活動を通して、次の事項を指導する。

ア 身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に思い付いてつくること。

イ 感覚や気持ちを生かしながら楽しくつくること。

ウ 並べたり、つないだり、積んだりするなど体全体を働かせてつくること。

■造形遊び実践例の写真5点

人工物、自然物

■本日の課題の確認

作品をつくって

それを写真に撮る。

作品は2つ

1作品で写真1枚

提出写真は2枚。

送信〆切：7月3日（木）

■送信のフォーマット

送信先アドレス：

●●●@yamaguchi-u.ac.jp

件名 : 氏名のみ

★必ず明記！！

例：高杉晋作

本文：タイトル（任意）

フォーマットを守らない場合、減点とします。相手の立場で考えましょう。

■注意！

屋内・屋外は問わない

破壊行為・殺傷行為は禁ずる

■日本人らしいあなたへ

日本の子どもたち

「・・・していいですか？」

アメリカ合衆国の子どもたち

「やってはいけない」と言われたこと以外は何をやってもいいのだと解釈

b y 江崎玲於奈

2-2-2 鑑賞会

吉田担当分第6回（最終回。7月4日）に全提出作品を全員で鑑賞した。あらかじめ授業者が全作品をメールからフォルダへコピーしておいて、スライドショー機能でプロジェクション（投影）した。

2-2-3 作品

提出された全作品を後掲する。左右2枚で受講者1名分。1ページに10名分の作品を掲げ、計60名分である。

タイトルが付けられた作品もあるが、タイトルは割愛する。

課題の趣旨を理解していないものも掲げた。

本稿への写真の掲載について全受講者の了解を得ている。

3. 考察

3-1 成果あるいは期待される効果

3-1-1 宿題という形式

学生に造形遊びを体験させることだけを考えるなら、個人の宿題としてではなく、もっと直接的に授業の中で造形遊びを体験させる方がよいことはわかっている。しかし、限られた授業枠の中で、他の内容、即ち私が担当する平面造形の内容も実践しなければならないため、インスタレーション的な造形遊びを授業内で実践することは難しい。したがって、次善の策として宿題という形式ではあるが、学生に造形遊びの一端を体験的に理解させる結果となっている。平たく言うならば、やらないよりはやる方が良い、ということである。

3-1-2 図画工作や美術への苦手意識を持っている受講生にとって

小学生でも学年が上がるにつれて図画工作科に苦手意識を持つ児童が増えてくる。大学生になるとその苦手意識はかなり強固である⁷⁾。絵画的表現や彫刻的表現あるいは工作的・工芸的な表現に対して苦手意識を抱いている学生にとって、身近な材料を並べるだけの活動は、自分の苦手意識に関係なく取り組める造形活動である。図画工作科の教科内容にこのような活動が存在することを体験的に理解することに大いに意義がある。

3-1-3 相互鑑賞・全員鑑賞の意義

鑑賞会では、受講生は他者の作品に興味を持ってよく見る。ユーモアのある作品に対しては大らかな笑いが起こり、優れたアイデアや工夫や造形効果に対しては素直な驚きと称賛の声があがる。自分が取り組んでみたからこそ他者の作品への興味・関心である。

筆者は、教育活動における児童・生徒・学生の相互評価に対しては反対である。学習者は相互に支援する

仲間であって、評価する関係や立場にない。子どもたちを、相互に評価する関係や立場にしてはならない⁸⁾。

相互鑑賞と相互評価は同じではない。発表会や鑑賞会は大に行うべきであるが、相互に作品や表現の良し悪しを述べさせたり記させたりすることは慎むべきであると筆者は考える。

この授業においても、もしも鑑賞会のあとに相互評価を入れたなら、これまでのような明るく屈託の無い受講生の表情や雰囲気は無くなってしまわないか。

3-1-4 より豊かな図画工作科のためのベースとして

一般的に、教師は自分が経験していないことは教えない傾向にあると言われる。

小学校の教師を目指す学生が、大学時代に造形遊びとその背景にある美術の手法・形式を経験しておくことは、卒業後同様の活動を子どもたちに経験させる可能性を高める、いわば種を蒔く営みである。より豊かな図画工作科の種である。

3-1-5 指導法の授業との関連

山口大学においても梅光学院大学においても、カリキュラム上の授業科目の順序が、図画工作科に関しては、教科に関する科目が先で（両大学とも第3 Semester）、その後に関指導法に関する科目が控えている（山口大学「教科教育法図画工作」が第4 Semester、梅光学院大学「図画工作科の指導法」が第5 Semester）。教科に関する科目における「インスタレーション、造形遊び」の経験を踏まえて図画工作科の指導法に関する授業を受講する学生は、大学における自己の体験を基に、より具体的に、より深く造形遊びを理解することができる。

3-2 今後の課題：オブジェを見せることの是非

既に述べたとおり、「インスタレーション、造形遊び」の説明の際に「このようなアートが出てきた歴史」として、マルセル・デュシャンの「自転車の車輪」と「泉」、そしてマン・レイの「破壊されるべきオブジェ」と「贈り物」を見せている。「泉」はレディ・メイドであり、いわばファウンド・オブジェである。あとの3つは組み合わせの妙が魅力のオブジェである。これらはインスタレーションの源流ではあるが、「1970年代に一般化した」という辞書的な意味でのインスタレーションとは少し異なる。また、この授業で参照している小学校の学習指導要領からの抜粋「ア 身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に思い付いてつくること。イ 感覚や気持ちを生かしながら楽しくつくること。ウ 並べたり、つないだり、積んだりするなど体全体を働かせてつくること」とも少し異なる。

来年度、デュシャンとマン・レイを見せないで課題に取り組みせて、結果がどのようになるか見てみたい。

註

- 1) 吉田貴富：「『図画工作科を教えるために』教科に関する科目における実践【1】～鉛筆削り～」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第36号、2013年。
吉田貴富：「『図画工作科を教えるために』教科に関する科目における実践【2】～みること『顔に見えるもの』～」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第37号、2014年。
- 2) 造形遊びの実践の状況は、もちろん地域によって、学校によって、教師個々によって異なる。筆者が接する学生に尋ねた範囲では、山口県と福岡県では実施率が低いようである。
- 3) 美術教育が「子どもの論理」と「美術の論理」から構想されることを、吉田貴富は、指導法に関する科目（山口大学教育学部「教科教育法図画工作」、梅光学院大学「図画工作科の指導法」）の中で講じている。
- 4) チゼックに関するエピソード等は、石崎和宏『フランツ・チゼックの美術教育論とその方法に関する研究』建帛社、1992年、に詳しい。
- 5) 宇田秀士の、造形遊びに関する一連の研究に詳しい。
- 6) 小・中・高等学校の美術教育において、インスタレーションを含むいわゆる現代美術が正面から取り上げられていないことの結果でもあろう。
- 7) 筆者は、当該の図画工作科の教科に関する科目（山口大学「初等科図画工作」、梅光学院大学「図画工作」）において、描画への苦手意識克服のために、写実的な描画能力の向上のためのトレーニングとして、

ベティ・エドワーズの方法論を用いた描画トレーニングを実践している。これについては稿を改めて報告・考察したい。

8) 協同して事に当たる集団において相互評価が本当に必要で有効であるなら、教員同士で勤務状況を相互評価して、その結果を勤務評定に反映させるべきだと思われる。

【作品】











